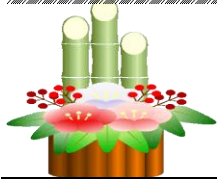




～ 夢ひとすじに ～  
宮原中だより

自ら学び 心豊かに たくましく

平成 27 年度 第 11 号  
平成 28 年 1 月 7 日 (木) 発行  
さいたま市立宮原中学校  
メールアドレス  
miyahara-j@saitama-city.ed.jp  
ホームページアドレス  
<http://miyahara-j.saitama-city.ed.jp/>



「帰らんちゃよか」

校長 やました せいじ  
山下 誠二

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

今年も「さわやかなあいさつ」「校歌を大切に」「靴のかかとを揃える」の行動目標に引き続き取り組んでまいります。そして「元気に登校」「笑顔で下校」できる生徒を一人でも多く育成していきます。

本年も宮原中学校の教育活動にご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

数年前に大宮ソニックで島津亜矢のコンサートを妻と聴きに行ったことがありました。そこで聴いた曲「帰らんちゃよか」が、昨年の大晦日、紅白歌合戦で歌われました。この歌は、1995年にシンガー・ソングライターの間島秀樹が「生きたらよか」というタイトルで世に出し、肥後にわか役者の、ぼってん荒川が「帰らんちゃよか」というタイトルでカバー。その後、現在の島津亜矢が歌い継ぐことになりました。「生きたらよか」が発表された1995年は阪神淡路大震災の年でもあります。間島秀樹は被災者への応援歌も発表していますが、この歌が震災後に作られたものなのか、その前にできあがっていたのかはわかりませんが、震災後の日本人の家族観がこの歌に反映されているように聴こえてきます。時代をさかのぼれば、明治の時代から昭和の戦争と戦後、そして現在に至るまでに、父親を絶対的存在とする家族観は、さまざまな問題などが根強くあるものの、一方でわたしたち日本人の家族のありかたは大きく変わったことも事実としてあります。とりわけ戦争の傷跡から出発した戦後の日本社会は、若者が集団就職などや都会への憧れから地方の親元を離れて都会に出てくるようになりました。そして地方での暮らしが成り立たなくなり、家族の長である父親もまた「出稼ぎ」に都会に出てきたり、最後には家族全員が故郷を捨てて都会に移り住むケースも少なくなかったと思います。高度経済成長にともなう現金収入が増えていく都会の労働者にとって、現金収入の乏しい地方の暮らしは厳しく、旧来の地方のコミュニティが壊れていってしまうのは仕方ないことだったのかもしれない。

そんな世の流れとともに、地方に住む親は都会で暮らす子を想い、子は故郷に住む親を想う数々の歌謡曲が生まれました。子を励まし、いざとなれば帰ってこいと応援する親、都会暮らしに疲れ、故郷に帰りたと思う子…。そこでは「親を想う子、子を想う親の気持ち」が歌われ、それらの歌に多くの日本人が、自分たちの家族の実像を重ねることで慰められてきました。熊本弁で書かれた「帰らんちゃよか」の歌詞は、手紙のような設定になっています。父親が母親との暮らしを語り、帰る田舎があるからといいわけにすんなよと、都会で暮らす子を励まします。「心配せんでよか、帰らんちゃよか。どうせ俺たちや先に逝くのやけん、お前の思った通りに生きたらよか。」この歌が聴く者の心の最も柔らかい場所にまで届き、多くの人々が涙を流し、時には島津亜矢自身が歌いながら涙を流してしまうのは、30年前に歌手になるため、東京に行く彼女と母親を送り出してくれた彼女自身の父親への思いが込められているのではないかと思います。そして、この歌はいつの時代も変わらぬ親子の愛情や家族のきずなをキーワードにしながら、もう待ったなしの高齢社会における高齢者への尊厳と介護の問題までも包摂している歌として、大切な一曲でありつづけると思うのは、私だけでしょうか。私と同じ熊本出身の鍛冶自治会の上野健次郎会長、いかがですか？

